

低標高・沿海地帯における草地の実態

山下恒由(長崎県畜産試験場)

Tsuneyosi YAMASHITA: Research on actual condition of
Glasslands in Low-altitude and Coast Area

長崎県における草地は、離島を中心とした沿海地帯並びに低標高地帯に主として分布している。今回、県下の主要地帯について草地の実態調査を実施したので報告する。

1. 調査方法

現地における実態調査を実施した。調査時期は県本土地域並びに大島村は1989年7月下旬、宇久町並びに小値賀町は'90年2月下旬に行った。

2. 結果及び考察

1) 草地の実態

(1) 県本土地域

①採草利用草地

(北松浦郡吉井町上吉田)

1981年にブルドーザにより造成し、当初バヒアグラスとローズグラスを混播し、その後、オーチャードグラスとイタリアンライグラスを追播し現在に至る。肥培管理も充分になされ年4～5回の刈取りを実施し、10a当たり10t程度の収量と推察された。草種はバヒアグラスを主体に一部ダリスグラス、オーチャードグラスが混在している。

②放牧利用草地

(北松浦郡小佐々町)

2カ所について調査した結果、1971年と50年代前半にバヒアグラスを主体に造成されている。現在の草種としてはいずれもバヒアグラス主体であり、集約放牧地ではバヒアグラスの良好な定着がみられるが、粗放牧の所ではススキ等の長草型野草の侵入がみられ荒廃している。尚、トールフェスクを播種した草地では若干の定着が見受けられる。野草としてはチガヤ、ススキ、サルトリイバラ、ノイバラ等が侵入している。

(2) 離島地域

(北松浦郡大島村戸田)

1971年にブルドーザで山成り造成し、バヒアグラス、トールフェスク、シロクローバ他3種を混播した。

放牧利用が主体であるが一部採草利用も行われている。

①放牧利用地

牧草ではバヒアグラスが優先し、次いでトールフェスク、シロクローバが定着している。野草等ではチガヤ、ノシバが主体で一部ノイバラ等が侵入している。管理については過去2回施肥が実施されたが、ほとんど放任状態である。牛の採食はバヒアグラス主体である。

②採草利用地

チガヤ、ササが優先しバヒアグラスの定着は少ない。これは収量を求めるため、草丈が高くなってから採草し

ているのでバヒアグラスが被圧されたものと思われる。
(北松浦郡宇久町)

3牧場について調査した結果、いずれも造成後20年以上経過しているが牧草ではバヒアグラスの定着が良好で、ほとんどの草地がバヒアグラスとノシバの優先草地である。管理としては、若干の追肥を行う程度である。

野草等の侵入はチガヤ、ススキ、アザミ、サルトリイバラ、ノイバラ等であり一部ギシギシ、チカラシバが見受けられる。

(北松浦郡小値賀町)

2牧場について調査した結果、過去に野草地改良の関連事業でバヒアグラスの播種と施肥を実施している。

現在の草種はノシバとバヒアグラス主体である。

管理はほとんど実施されてなく、野草等ではチガヤ、サルトリイバラ、ノイバラ、オオバコ、チカラシバ等が見受けられる。

2) 考察

(1) 草地の造成法及び管理技術

①草種と造成法

現在までの実績からバヒアグラスを基本草種とすべきであり補完草種としてトールフェスクが適当であろう。

造成法としては、不耕起による低コスト造成法を確立する必要がある。

②管理技術

ほとんどの草地が放任型であり、施肥及び掃除刈り等も実施されていないので今後は、草地の立地条件、利用形態に見合った管理技術の導入が必要である。

(2) 草地利用技術

採草地の利用は良くなされているが、放牧地の利用は草地の立地条件、地域の慣習等で種々雑多である。今後は放牧地と畜舎との有機的なつながりをもたせるとともに、過放牧の改善、輪換方式の導入が必要である。

(3) その他

ほとんどが集落共有地であるが、従前と比べ飼養農家が減少したため土地の所有権、利用権の見直し等が必要な地域もある。